

コラージュ、そして生き物としての言葉

アリ・スミスとモダニズム

西野 方子

2016年に出版されたアリ・スミスの『秋』は、美術を専門にする任期付きの大学講師エリサベス・ディマンドが、かつて隣に住んでいた老人ダニエル・グルックの入居する介護施設を訪ねる様子を追いながら、EU 離脱を問う国民投票後のイギリス社会を描くポスト・ブレイグジット小説である。現在や過去のエピソード、そして長い時間を寝て過ごすダニエルのみる夢を切り貼りして作られたこのコラージュ作品は、実在する1960年代のポップ・アーティスト、ポーリーン・ボティへの言及を通してコラージュの技法について語る物語でもある。コラージュは個々のものが文脈から切り離さればらばらになった状態を表現する技法である一方で、それらをつなぎ合わせ新たな関係性の中でひとつの作品をつくるための手法でもあり、『秋』はその技法を用いて個々の人々や物事の間関係性の再構築を模索する。コラージュのルーツは20世紀初頭のモダニズムを含めたアヴァンギャルド芸術にあり、また人々の分断と連結可能性はモダニズムにおいても重要な主題であった。本発表は『秋』の前作でもあるスミスの2014年の作品『両方になる』にも言及しながら、『秋』におけるコラージュの概念とヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』で提示された世界の連続性との関連を示し、社会的分断が重くのしかかる今この時代にモダニズム文学を読み直すことの意味を考えるものである。

『秋』においてダニエルは、大学を意味する「college」という単語を「collage」という単語に変化させ、「コラージュというのはあらゆる規則を捨て去った教育機関」であり、「そこでは大きさ、空間、時間、前景、背景みたいなものがすべて相対化され」、そして「その結果、自分が知っていると思っていたものがことごとく新たなもの、見知らぬものに生まれ変わる」と述べる (Smith *Autumn* 71-72; スミス 『秋』 71)。『秋』において、空間と時間を組み合わせるコラージュは植物のように成長し変化する「生き物」としての「言の葉」によって紡がれるが、この植物としての言葉という概念は『両方になる』から引き継がれた主題でもある (スミス 『秋』 68)。主人公のジョージが母の死を受け止めていく過程を描くこの前作は、言葉が関係性の中で変化し、そして断片化した過去が現在や未来と接続されることで有機的な世界が構築されることを体現する作品だ。生前、ジョージの母は「言語は常に成長し、変化を続ける生き物だ […] 生き物 [オーガニズム] というのは、 […] 自分自身の規則に従い、好きなように規則を改変する」 (スミス 『両方になる』 8-9) と娘に告げている。ジョージはヘレナとの親交を深める中で、言葉が生き物であるという母の考えを徐々に理解しながら、母の死を過去・現在・未来という連続した時間の中で捉え直し、混乱した自らの思考の秩序を回復させる。

『両方になる』の描く有機的に繋がる世界は、モダニストの示す世界像に連なるものである。ジョージに過去・現在・未来を連続性の中で捉えるきっかけを与えたのは、「私が死んだときもきっと、町はこんな風景なんだ」という、自分が死んだ後も続いていく世界についての認識であった (スミス 『両方になる』 71)。このジョージの認識は、『ダロウェイ夫人』でクラリッサが示した自らの死後も存続する世界の認識—たとえ死んだとしても「なにかのかたちでこういったロンドンの街並みのなかに、諸物の干満に揺られながら、ここそこに生きつづける […] 一度も会ったことのない人の一部となって生き残ってゆく。ちょうど靄が木々に支えられるように […] はるか遠くまで生き残ってゆく」—と呼応する (ウルフ 22)。『ダロウェイ夫人』は、トフィーの広告やビッグ・ベンの鐘の音が同じ時代・同じ空間に生きる人々を繋げる様子を、過去・現在・未来の時間的な繋がりへの想像力と並べて描く作品である。『両方になる』、そしてその主題を引き継ぐ『秋』もウルフの作品と同様に、同じ時代に隣に存在するという空間上の繋がり、過去・現在・未来の間の時間的繋がりをコラージュのように並列させながら、分断する社会でばらばらに存在する人々の間にどのような関係性が築けるのかを探究する作品である。

『秋』は冒頭でイエイツの「再臨」を引用しながら、世界が再度ばらばらになったことを強調する。ダニエルが夢に見る、ヨーロッパを目指し命を落とした人々の遺体が横たわるすぐ側で、別の人々がバカンスを楽しむ浜辺の様子は、死と生の、そして悲劇と無関心の間に横たわる断絶を露わにする。そのような分断への抵抗の可能性を象徴するのが、ダニエルがつくる葉っぱのコートだ。少女たちが近づいて来ることに気がつき、裸であったダニエルが慌てて縫い合わせたこの葉っぱのコートは、自分だけではなくその周囲に存在する人々のために作られたものであり、また「現代の西洋では […] ずいぶん悪いもののように言われている [死]」を考え直すきっかけを与えるものでもある (スミス 『秋』 12)。浜辺で亡くなっている人を含めた他者に向けて作られ、またイギリスを含めヨーロッパ社会で「悪いもののように」捉えられているものに対して異なる考

え方を示すこの植物で編まれたコートは、浜辺で亡くなる人々とバカンスで生を謳歌する人々との断絶の変化の可能性を暗示する。言葉は植物であると述べるこの作品は、植物的な言葉を分断に抵抗する手段とみなし、植物としての言葉で社会を綴ることによって見えてくる新たな世界の可能性を提示するのである。

植物としての言葉によって紡がれるのは、偶然同じ世界に居合わせた個々の人々と、また過去から現在へと連なるさまざまな出来事を繋ぎ合わせたコラージュだ。過去が現在と出会い、互いが変化することで未来がつくられることは、ボティと、ダニエルの妹ハンナ・グレックのイメージの重なりからも読み取ることができる。エリサベスがボティについて解説するよう頼まれた後に挿入されるナレーターによるボティについての語りには、ネル・ダンが実際にボティに対して行ったインタビュー内のフレーズが、まさにコラージュの手法を用い切り貼りされ散りばめられている。「私は昔、兄と向かい合って座っているとき、兄に対する愛が自然にあふれてきて、まるで自分が兄のために作られたんじゃないかと思ったことがあります」という言葉はインタビューから直接引用されているボティ自身の言葉だが、この唐突に現れた兄に言及する一人称の語りはまるでダニエルの妹の声のように聞こえる（スミス 『秋』 229）。兄のために編まれた（「I was knitted to him」）というボティの表現は、ダニエルが縫って作った葉っぱのコートを思い出させ、またそのコートが植物の言葉で編まれたこの作品自体を象徴していることを考えれば、このボティの言葉に兄のために編まれたダニエルの妹の声を聞くことは十分可能である（Smith *Autumn* 247）。ボティと同じく「世界を読み解く」存在として描かれ、「大人になればきっと、世界でも大きな力を持った存在、重要な評論家、変革者、いっばしの論客になるだろう」と考えられていた賢く大胆な妹ハンナは、美術史に残ることのなかったボティと同様、名前を忘れ去られた存在であった（スミス 『秋』 229、179、181）。しかしながらこの作品は、近年ボティの再評価が進みつつある事実と、また登場人物が覚えていない記憶からも物語を語ることでできる語り手の存在によって、彼女たちのように忘却されていた人々や出来事が現在、または来るべき未来に蘇る可能性を示唆する（スミス 『秋』 119）。この考えは『ダロウェイ夫人』でクラリッサが思い描いていた死後の世界、自分の存在が空気のようにその場に残った状態で続いていくという世界像に通じる認識であり、過去が現在、そしてその先の未来へと繋がって存在し続けるというモダニズム作品で描かれたヴィジョンを共有しながら、『秋』はコラージュというモチーフを技法的にも物語内容的にも展開することで、過去と現在が交差しながら新たな世界が構築される可能性を提示するのである。

エリサベスの母は「今より優しい時代、今より博愛的だった時代の品々、人々の歴史が詰まった品」を、公共の土地を囲うように増殖を続ける電気フェンスに投げつけることで分断に抵抗しようとする（スミス 『秋』 237）。「今より優しい時代、今より博愛的だった時代」としての1960年代という考え方に対して、ボティが当時女性芸術家として困難を感じていた事実や、また彼女の名が美術史の中で忘却されてきたという事実が疑問を投げかけていることを考慮すれば、この母の行為には過去と現在を交差させながら「よかった過去」と「悪い現在」という二項対立を突き崩し、過去と現在の混じり合いによって変化していく未来を目指す作品の態度を読み込むべきであろう。ボティがノスタルジアという言葉を用いた古いものと新しいものとの衝突から生まれる表現と結びつけたように、過去と現在が接触を繰り返すことで変化が起こることを信じる母の行為は、過去と現在がともに変化しながら未来が作られていくというこの小説のコラージュの概念を体現するものなのだ（スミス 『秋』 227）。拡散と連結というモダニズムの主題を扱いながら、『秋』はその主題が分断の叫ばれる現代でも意味をもつことを提示しているのである。

主な参考文献

Dunn, Nell. *Talking to Women*. Silver Press, 2018.

Kostkowska, Justyna. *Ecocriticism and Women Writers: Environmentalist Poetics of Virginia Woolf, Jeanette Winterson, and Ali Smith*, Palgrave Macmillan, 2013.

Jelínková, Ema, and Rachael Sumner, editors. *The Literary Art of Ali Smith: All We Are Is Eyes*, Peter Lang, 2019.

Smith, Ali. *Autumn*. Penguin Books, 2017. [アリ・スミス (2020) 『秋』 木原善彦 (訳) 新潮社]

—. *How to Be Both*. Penguin Books, 2015. [アリ・スミス (2018) 『両方になる』 (「カメラ」の後に「目」が続くバージョン) 木原善彦 (訳) 新潮社]

Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. Edited by Elaine Showalter and Stella McNichol, Penguin Books, 1992. [ヴァージニア・ウルフ (2007) 『ダロウェイ夫人』 丹治愛 (訳) 集英社]

霜鳥慶邦 (2020) 『百年の記憶と未来への松明 (トーチ) : 二十一世紀英語圏文学・文化と第一次世界大戦の記憶』 松柏社